

# 朝鮮半島のキリスト教

——特にカトリック教会を中心にして——

三好千春



日本におけるカトリック、プロテスタント、ハリストス正教会を合わせた全キリスト教徒数が、総人口の1%程度であり、そこから伸びないということはよく知られている。またアジアは、仏教、イスラム教、ヒンズー教などが根強く、キリスト教信者はアジアの全人口において3%程度とも言われる。

ところが、こうした状況の中で、アジアにおいて国民に占めるキリスト教徒の比率が例外的に高い国が二つある。それは、フィリピンと大韓民国（以下、韓国と略記）である。

国民の90%以上がキリスト教徒というフィリピンは、長くスペインの植民地となっていた関係でアジア随一のキリスト教国となっており、その因果関係は容易に納得でき

る。

他方、韓国は日常生活にも儒教文化が浸透した儒教の影響が強い国であるにもかかわらず、最低でも人口の二五%がキリスト教徒と見積もられている。韓国のカトリック教会だけでも二〇〇五年現在で約四四六万人の信徒を抱えているが、これは日本人の全キリスト教徒の総計が百万人ほどであることを考えると驚異的数字である。

また、韓国の精神的指導者は誰かというアンケートでは、しばしばカトリックの金承煥枢機卿が上位に入り、キリスト教が韓国社会と精神的に密接に関わっていることを伺うことができる。

なぜ、儒教文化圏の東アジアの一国である韓国において、このようにキリスト教が浸透しているのだろうか。

本稿は、この問いをキリスト教が朝鮮の社会といかに関わってきたのかという視点に基づきつつ、一七八四年以来二百年以上にわたる朝鮮半島におけるキリスト教の歴史を概観することを通して考えようとするものである。なお朝鮮半島のキリスト教には、一八世紀後半に入ってきたカトリックと、カトリックから約百年遅れで来たプロテスタントがあるが、本稿ではカトリック教会の歴史を中心に概観していることをあらかじめお断りしておく。

## 一 「無父無君の邪教」

——一七八四年～一八八六年——

一八世紀半ば、現実から遊離し空理空論化していた朱子学に対し、西洋の科学・学術（西学）を積極的に取り入れようとする実学派が登場すると、その中の一部の人々は西教（カトリック）にも関心を抱いて研究するようになった。

その中の一人であった李承薫は、一七八三年に使節団の一員として北京に行く機会を得て北京の天主堂を訪ね、一七八四年一月にグラモン神父よりペトロという霊名で洗礼を受けた。このように、朝鮮人のほうから宣教師を訪れ、自ら求めて受洗したところから始まった朝鮮半島のキリスト教は、キリスト教史上ユニークな地位を占めている。

受洗後、教理書、十字架像、聖画などを携えて帰国した

李承薫は、他の仲間洗礼を授けた。聖職者（神父・司教）はいなかったが、主体的に生まれた朝鮮の信徒集団は、日曜日ごとに集まり、書物の知識を頼りに李承薫を中心にミサを行った。聖職者が重要な役割を果たすカトリック教会において、一七九四年末に中国人司祭が派遣されるまで、朝鮮人の一般信徒だけで自主的に信仰共同体を作り上げカトリックの教えを伝えていたのである。

実は、朝鮮のカトリック教会における神父不在期はこの時期だけではなく、その後も厳しい迫害のために一八〇一年から一八三一年、および一八三九年から一八四五年の間も同様で、聖職者不在期は合計で五〇年近くに及ぶ。だが、その間も朝鮮のカトリック教会は拡大を続けており、一般信徒による信仰運動だったことが伺える。

朝鮮の教会は、当初こそ両班階級出身者を中心としていたが、教会が始まってから一〇年のうちに、中心は両班から中人階級（両班階級の下に位置づけられ、通訳、天文、医術などの専門職に従事した人々）に移り、一九世紀初頭には、主力は中人と常民（農民、商人、手工業者などの一般民）出身者となり、そこに被差別民も加わっていた。また、儒教体制下で弱い立場に置かれていた女性からも、多くの信徒が生まれた。

教会の主軸が上層階級から下へ下へと移動して、庶民の教会となった背景には、教会がごく初期からハンブルで

『聖經直解』や『主教要旨』などの教理書を出版していたことがある。ハングル文書は、漢文の読めない庶民や女性にカトリックを浸透させる大きな原動力となった。ハングルは一五世紀に発明されたが、朝鮮王朝は漢文を重視していたため、一九世紀末に公用文に用いられるようになるまで長く民間の文字として軽んじられていたが、カトリック教会はその価値を認めて最初から積極的に使用したのである。なお、ハングル重視は朝鮮のキリスト教の特徴で、一九世紀後半に朝鮮にやってきたプロテスタント教会も朝鮮入国前から聖書のハングル訳に着手するなど、ハングルを最大限に活用している。

カトリックへの迫害は教会が始まるのとはほぼ同時に起こり、三大迫害を含めて何度も繰り返され、一八八六年に朝仏修好条約が締結され一応の信教の自由を得るまでの百年間で殉教した人数は中国人司祭一人、フランス人宣教師一二名を含む約一万人と推定される。

カトリックが繰り返して弾圧された理由は、それが朝鮮王朝を支える儒教を基盤とした支配イデオロギーと相容れなかったからである。例えば、当時のカトリック教会は、儒教の家族倫理の基礎となる祖先祭祀を信徒に禁止していたため、孝道に反し人倫を乱す邪教として非難を浴びた。またカトリックは、神の前に人は平等であると説き、神を父としてそれを第一としたため、「無父無君」の邪教として

も批判された。

その上、ハングル訳のカトリック要理書は家族倫理の中心軸を儒教倫理が基本とする父—息子関係から夫—妻関係に移し、一夫一婦制を主張して祖先祭祀を受け継げる男子を得るために妾を取ることを罪とし、離婚を禁じた。さらに、カトリックは神に仕えるために結婚せずに生涯を捧げる行為を尊いものとして称揚した。実際、女性信徒の間からは、神に仕えるために結婚せず共同生活をする、あるいは信徒の男性と偽装結婚する者たちが登場し、女性の最大の義務は、結婚して男子をもうけることとする儒教倫理に挑戦した。こうしてカトリックは朝鮮王朝にとって、儒教的価値観によって立つ社会に新しい価値観を突きつけ、儒教社会の根本を脅かしかねない存在として登場したのである。

ただし、朝鮮カトリック教会自身は一九世紀の大半において度重なる迫害を受けたことにより、信徒たちは田舎の人里はなれた場所に自分たちの村(教友村)を作り、外の社会に対して自らを閉ざして教会の成長にのみ関心を集中させる、いわゆるゲッター状態に陥っていた。朝鮮社会に對する大きな影響力の可能性を秘めながら、教会自体は社会から見えない存在になろうとしていたのであった。

## 二 「カエサル」のものはカエサルに

——一八八六年～一九四五年——

### (一) 韓国併合以前「一八八六年～一九一〇年」

「殉教の教会」としてカトリックが社会に対して閉じていたのに対し、一八八〇年代になって朝鮮半島に入ってきたプロテスタントは、より積極的に朝鮮社会に関わった。

一八八四年、医療宣教師のホールズ・N・アレンが公使館付きの医師としてソウルに入り、翌八五年には、長老派の宣教師ホールズ・G・アンダーウッドとメソジストの宣教師ヘンリー・D・アペンゼラーが朝鮮に入国して、本格的にプロテスタント宣教は始まった。

プロテスタント教会は、特に医療と教育事業に力を入れて朝鮮社会に関係した。朝鮮最初の近代的教育機関である培材学堂（一八八六年開校）および最初の女子教育機関である梨花学堂（一八八七年開校）はどちらもメソジストによって始められた。一九一〇年までにプロテスタントは七〇〇の学校を開校したが、カトリックは一三〇校でそのほとんどは初等教育機関であった。

また、カトリックと異なりプロテスタント宣教師たちは朝鮮王室から信任を受けていた。きっかけは、一八八四年

に暗殺未遂に遭った閔泳翊（高宗の王妃、閔妃の一族）がアレンによって一命を取り留めたことであった。その後、一八九五年の日本人による閔妃殺害事件の際、孤立無援だと怯える高宗のもとにアメリカ人宣教師たちが駆けつけて王を守った。また、毒殺を恐れた高宗が唯一安心できる食事を提供したのは、宣教師夫人たちであった。

さらにプロテスタントの大きな特徴は、当時、日本の侵略により盛り上がりつつあった朝鮮のナショナリズムと結びついたことである。例えば、一八九六年にプロテスタントの徐載弼は独立協会の機関紙的役割を果たした『独立新聞』（純ハングル文）を発行、法治主義の確立や新教育の振興などにより自主独立を確保し文明開化しようと訴えた。

こうした活動のため、アメリカの宣教師は朝鮮の友であり、キリスト教徒は愛国者であるというイメージが誕生した。他のアジア諸国ではキリスト教は植民地主義と結びついてきたため強い抵抗を受けたが、朝鮮では脅威を増す日本に対抗する存在としてキリスト教（特にプロテスタント）が受け入れられたのである。

しかし、プロテスタントと違って同時期のカトリック教会は、政教分離と聖俗二元論を唱えるフランス人司祭の指導のもと、同時期の朝鮮国内の激動する状況に関わろうとしなかった。

政教分離の原則は、宣教師たちの宣教活動と国家の帝国主義的動きとを切り離すというプラス面を持っていたが、他方では非人間的な植民地政策などの社会・政治問題に対し教会が批判しないというマイナス面があった。

また、聖俗二元論によつて、カトリック教会のフランス人宣教師たちは、現世は俗なことであまり関心を持たないことが大切であると説く半面、天国に関することは聖で死後の魂の救いにこそ人は関心を持つべきだと強調して、現実の朝鮮社会で起こっている状況への関心が薄く、朝鮮人の信者たちが政治に関わることを嫌がった。要するに、当時のカトリック教会は、教会の靈的な領域を強めることのみ集中していたのである。

宣教師たちは自分たちの第一の務めはカトリック信徒の群れを守ることだと認識しており、カトリックの社会的活動の動機は多くの場合、信徒を守り増やすという点にあった。そのため、プロテスタントと異なりカトリックが焦点を当てていたのは、孤児院や職業学校、カトリック子弟のための宗教教育であり、西洋近代の知識を朝鮮に導入することではなかった。一八九七年に洗礼を受けた安重根は、朝鮮に大学を作るようソウルのミュテル (Muel) 司教に提案したが、高等教育は信仰をそこなうと言つて、司教はその願いを拒否した。

当時のカトリック信徒の大多数は庶民で教育がない上、

長い迫害のために財政的、人的、知的資源に乏しかったので、カトリック教会が社会を指導する力は弱かった。教会は一九〇六年に西洋人司祭のもとで『京郷新聞』を純ハンブル文で出したが、それはハンブルしか読めないカトリック信徒がそれを読めるようにという配慮のためであつて、『独立新聞』のように朝鮮の自主独立を主張しているからという理由ではなかった。

一九〇五年に保護条約により大韓帝国が日本の保護国となり統監政治が始まると、愛国啓蒙運動や反日義兵運動などの抵抗運動が起こつたが、朝鮮人プロテスタント信徒が積極的にこうした抵抗運動に関わつたのに対し、カトリック教会の反応は極めて消極的であつた。『京郷新聞』は義兵闘争を非難し、日本は朝鮮に文明をもたらしてくれろかもしれない存在であると説いた。ミュテル司教も「革命的な」状況を教会にもたらさない限り、強い力のもとに服従することが教会の生きる道だと説いた。

もちろん朝鮮人カトリック信徒の中には教会よりも自らの判断を優先させ、抵抗運動に加わる者たちもいた。例えば、一九〇八年に日本の立場を擁護する活動を行つたアメリカ人の外交顧問ステイブンスを射殺した二人の韓国人のうち一人はプロテスタントであつたが、もう一人はカトリックであつた。

抵抗運動に加わつた朝鮮人カトリックで最も有名な人物

は、安重根である。しかし、義兵闘争に身を投じていた安重根が一九〇九年に伊藤博文を射殺すると、『京郷新聞』は彼の行為を、殺人は殺人であり悪の行為だと非難する社説を載せ、ミユテル司教は安重根を教会から破門した。

## (二) 日本植民地時代「一九一〇年～一九四五年」

一九一〇年八月二三日、「併合条約」が締結され日本が朝鮮を併合すると、西洋人宣教師たちは、カトリック、プロテスタントを問わず、日本の支配は朝鮮に文明をもたらすと歓迎して、公式にも受け入れを表明し、朝鮮人信徒には日本に逆らわぬように指示を出した。

一方、日本は統監府時代より朝鮮のキリスト教に警戒心を強く持つており、当初、朝鮮総督府はキリスト教を懐柔することが重要だと考えていた。総督府は大日本国憲法を朝鮮にも適用、第二八条に基づいた条件付きの「信教の自由」を保障したが、総督府とキリスト教の友好関係は間もなく崩れ始めた。ただし、総督府の標的になったのは、独立運動に関わっていたプロテスタント教会であり、カトリック教会は直接の対象になつたわけではなかった。特に一九一九年三月一日から始まつた独立示威運動(三・一運動)は、朝鮮社会におけるカトリック教会の位置を鮮明に映し出している。

三・一運動の指導者三三名中、天道教が一五人、仏教が

二人、そして残り一六人はプロテスタントであった。この「独立宣言」に署名した三三名の中にカトリックが一人もいないことに象徴されるように、「騒擾の渦中に在つて、終始微動だもしなかつたものは、カトリック教徒」と日本支配層が称えたほど、朝鮮カトリック教会はこの運動から距離を置いていた。もちろん、自身の判断で三・一運動に参加した朝鮮人カトリック信徒たちもいたが、彼らは教会から批判され、示威運動に加わつた数人の神学生はただちに神学校を退学させられた。

大邱のドマンジュ(Demangju)司教やミユテル司教といった朝鮮教会の指導者たちは、日本の朝鮮支配は合法的として総督府に協力的であった。司教たちは韓国の教会が政治的活動をすることに反対し、彼らが「政治運動」とみなした三・一運動に朝鮮人信徒たちが参加しなかつたことを喜び、カトリックは総督府に対して忠誠のよい見本を示したと述べた。

以上のように、朝鮮のカトリック教会が日本の支配に抵抗しなかつた理由の一つは、司教を頂点として、その下に司祭、ついで一般信徒という、確立した教会の組織構造において、朝鮮人一般信徒を指導する立場の司教が全員、そして司祭の多くも西洋人であつたからである。植民地を持つフランスもしくはアメリカなど西洋諸国から来た司教、司祭たちは先述した政教分離、聖俗二元論に基づいて、

「カエサルのもものはカエサルに神のものは神に返せ」と説き、朝鮮人信徒に日本の支配に従順に従うよう求め、指導していたのである。

なお、教会を政治から切り離さねばと考えたのはカトリックの聖職者だけでなく、プロテスタントの宣教師も同様であった。日本統治下の朝鮮において西洋人宣教師たちは教会維持を第一とする視点から物事を見たのである。従って、三・一運動に挫折したプロテスタント教会も一九二〇年代以降は現実逃避的にならざるを得ず、保守化したキリスト教に代わって朝鮮人の間に共産主義が浸透するこゝとなつた。

ところで、一九二五年に朝鮮神宮が完成して参拝が求められた時、カトリックも含めて全キリスト教会がそれに反対した。朝鮮のカトリック教会はすでに一九一七年に、神社で挙行される儀式は宗教的性格を強く帯びたものなので拒絶するようという指示を出し、その後一九二五年に刊行した『天主教要理』でも参加拒否をはっきりと信徒たちに求め、それに従って信徒たちは参加を拒んでいた。

ところが、一九三二年、まず日本のカトリック教会が神社参拝は宗教的行為ではなく愛国心の表れとして受け入れ、それを追認する形でローマ教皇庁布教聖省が『祖国に対する信者の務め』を出した。そこには、神社参拝は「単なる愛国心のしるし」なので「カトリック信者がそれに参

加し、他の国民と同じように振る舞うことが許される」とあり、これによって、朝鮮カトリック教会は神社参拝を行う方向に一八〇度変わった。

この教皇庁の方針転換の背景としては、世界各地で共産主義思想に基づいたカトリック教会への弾圧、迫害が起こっていた一九二〇、三〇年代にあって危機感を強めた教皇庁が一九三七年に『デイヴィニ・レデンブトリス』（無神の共産主義に関するローマ教皇の回勅）を出して強い反共主義の立場を取り、反共主義を標榜する日本を支持していたことが挙げられよう。

その後、抵抗を続けていたプロテスタント諸教派も随時、神社参拝を受け入れ、信徒個々人の抵抗はカトリック、プロテスタント双方に多く見られたものの、キリスト教教会の公式な姿勢としては総督府に服従した。

### 三 「この社会の人間化のために」

——一九四五年〜現在——

#### (一) 教会の覚醒以前「一九四五年〜一九六五年」

一九四五年八月一日、日本の敗北によって朝鮮は植民地支配から解放されたが、次に朝鮮半島が味わったのは国家の分断であった。三八度線を境として以北をソ連が、以

南をアメリカが分割占領し、北はソ連の後押しのもと社会主義的改革を推し進め、南はアメリカの軍政下で反共主義の性格を強め、ついに一九四八年にはそれぞれ、金日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国、および李承晩を大統領とする大韓民国として独立したのである。

さらに両国は、一九五〇年から五三年にかけて朝鮮戦争を戦い、朝鮮半島は戦火によって蹂躪された。

このような厳しい政治状況の中、カトリック教会と社会の関係はいかなるものであつたらうか。

一九四五年以降、共産主義に反対する数百万もの人びとが北から南朝鮮に逃げたが、その中には北朝鮮が行つた弾圧から逃れてきた多数のカトリックおよびプロテスタント信徒がいた。越南派と呼ばれた彼らは最も反共的な存在となり、反共主義に傾いていた三八度線以南のキリスト教徒とともに反共親米路線を標榜していた李承晩を支える母体となつた。

一九五〇年に朝鮮戦争が始まると、韓国カトリック教会はこの戦争を反共の戦争として支持し、聖職者の中にはこの戦争は無神論への聖戦だという者さえいた。

共産圏となつた東ヨーロッパにおける教会への迫害のニュースや、朝鮮戦争中の北朝鮮軍による多数の司祭、司教の殺害などにより、韓国カトリック教会の目に、李承晩

とその反共主義路線は支持すべきものと映つた。大統領自身がキリスト教徒（メソジスト）で、彼の政権に多数のキリスト教徒が参加していたことも政権支持の理由となつた。

朝鮮戦争後のカトリック教会は急速に信徒数を伸ばし、一九五三年の休戦時には一七万ほどであつたものが、一九六二年には五三万人に膨れ上がった。この信徒増加の理由としては、戦乱の苦しみや戦後の混乱の中で精神的な助けを求めた人びとが多かつたこと、朝鮮戦争後、伝統的な価値観が揺らぎ、農村共同体が崩れて多くの人が都市へ流入する中で新しい価値観としてキリスト教が受け入れられたこと、アメリカのカトリック組織からの豊富な救済物資が教会を通して韓国に流れ込んだこと以外にも、カトリック教会が大学教育に参入し、一九五〇、六〇年代に病院を次々と開設したことで、カトリックが社会的に見える存在となつた点が指摘できる。

教会自身も、高等教育機関や医療機関などを次々と創設して社会との接触を強く持ち始めたこと、教会が伝統的に持つていた社会に対する閉じた意識を持たない人びとが新しく信徒として教会内部に急増したこと、そして、世界的なカトリック教会の動きとして信徒活動が盛んとなり、韓国でもレジオ・マリエやJOC（カトリック青年労働者連盟）といったグループが社会問題に関係する活動を始めた



ことなどの影響によつて、徐々に変化し始めた。これらの変化は七〇年代以降、カトリックが積極的に社会問題に関わる土台となつたと考えられる。

また、著名な人間、例えば李王家の一族や、文学者で歴史家の崔南善、政治家の金大中、詩人の金芝河などがカトリック信者となつた結果、カトリックはより魅力的に、より尊敬されるようになり、中流階級の人々を引き付けるようになった。このように教会の中心階層が下流から中流に変化したことも、教会の変化を促す要素となつた。

ところで、反共という観点から李承晩を支持していたカトリック教会であつたが、彼が独裁者と化していくにつれ、李承晩の政敵で有名なカトリック信徒であつた張勉と教会は同一視され、教会は政府から弾圧を受けるようになった。象徴的な出来事としては、一九五九年にカトリック系の『京郷新聞』が、張勉副大統領を支持したという理由で李承晩大統領によつて廃刊させられたことがある。

このような情勢の中、不正まみれの大統領選挙に抗議する激しいデモにより一九六〇年四月一九日に李承晩政権が崩壊する四月革命が起こつた。その後を受けて張勉による新政権が誕生したが、この政権は弱体で、わずか一年足らずで五・一六軍事クーデタが起こり、一九六二年に朴正熙政権が誕生することとなつた。

## (二) 教会の覚醒 「一九六五年〜現代」

一九七〇年代以後、カトリック教会は韓国社会と深く関わるようになったが、それには韓国社会と教会双方からの要因があつた。まず、韓国社会では急激な都市化と経済成長に伴う問題、特に労働者問題が噴き出し、また独裁政権化した朴正熙政権に対する抵抗運動が盛り上がったこと、次に教会内部では第二ヴァチカン公会議が開かれてカトリック全体の社会に対する姿勢が根底から転換し、かつ韓国カトリック教会の様々な側面が韓国化したこと等が、韓国教会の変貌の原動力として指摘できるのである。

朴正熙政権は政権の正当性に問題があつたため、経済面で成功することでのその権威を確立しようとして経済開発を優先し、韓国の高度経済成長をもたらした。韓国は一九六二年から八一年まで、年平均八・五%の高い経済成長率を誇り、国民所得も一人当たり八〇ドルから一八〇〇ドルにまで増大した。この経済成長に伴い急激な都市への人口集中が進行し、一九八二年には国民の七五%が都市の住民となつたが、それに伴い農・漁村から都市へと流れ込んだ人々がスラム街を作り、社会問題化した。

だが、より大きな問題は労働者問題であつた。高度成長を支える労働者の賃金水準の低さ、労働環境の劣悪さ、労働条件の過酷さなどが原因で、七〇、八〇年代には激しい

労働争議が頻発したのである。

他方、韓国カトリック教会は一九六二年に、裁治権を制限されていた「宣教地」という位置づけから独立して教大区・大司教区を設立、韓国人の手で教会運営を行う方向へと踏み出した。この時点では、まだ司祭団は外国人と韓国人の数が拮抗していたが、一九七四年には韓国人司祭が圧倒するようになり、司教団も韓国人化した。これにより、韓国の教会は自国の政治・社会問題に強い関心を向けるに至った。

さらに、一九六二〜六五年に開催された第二ヴァチカン公会議によって、それまで社会の世俗化に強く反対して自らを閉ざしていたカトリック教会はその方針を全く転換し、積極的に現代社会の問題、特に社会正義の問題に関わり始めた。この流れの中で、ラテンアメリカでは「解放の神学」が生まれ、南米のカトリック教会は各地の軍事政権に抵抗し始めたが、同じ流れは韓国の教会にも起こった。

教会は労働者の人権問題に強い関心を寄せ、JOCの活動を活性化させる一方で、高度成長から取り残された農村のために「カトリック農民会」を設立し、その後も、カトリック教会は民主化闘争に尽力する一方、労働者の生活を向上させるためにプロテスタントの都市産業宣教会と協働し、農村問題にも関心を向け続けた。

一九六八年、ソウル大司教が盧基南から若い金寿煥に代

わり、翌六九年、金寿煥は韓国人初の枢機卿に叙階された。同年、韓国司教団は「正義と平和協議会」を設立している。金寿煥枢機卿は人権、民主主義、社会正義の問題について積極的に発言を始め、ソウルの明洞大聖堂は民主化闘争の中心地の一つとなった。そして、しばしば司祭や修道女たちはデモの先頭に立ち、新聞の第一面を飾るようになった。

一九七一年は選挙の年で、朴正熙は辛うじて金大中を振り切って大統領に再選されたが、空軍特殊部隊が反乱を起こしてソウルで銃撃戦を展開し、広州団地では住民五万人が暴動を起こすなど国内は動揺した。こうした情勢下で、一九七二年に原州教区の池学淳司教が公に政治的腐敗を攻撃し、社会正義要求の声を挙げ始めた。

このような状況に対抗するため、朴正熙は七二年一〇月に突如、非常戒厳令を公布し「維新憲法」を制定して大統領に権限を集中させ、翌年から「維新体制」を始めた。「維新憲法」には大統領に緊急措置権が与えられていたが、これは要するに、大学、言論、キリスト教会などの反体制を封じ込めることが目的であった。民主化運動は大学とキリスト教の二つの勢力が水平にネットワークをつくることで担われていたからである。

一九七四年に緊急措置第一号と第二号が宣布され、学生運動は沈黙を強いられたが、都市産業宣教会に所属する牧

師一名が抵抗した。彼らが逮捕されて重刑を言い渡されると、学生はこれに反対する大規模なデモを起こした。すると、朴正熙政権はこれを共産主義者の反乱だと決めつけ、これを激励し資金援助をなしたとして、池学淳司教やカトリックの詩人金芝河らを逮捕・起訴したのである。

この事件にただちに反応して、カトリック教会内では神父たちによって「正義具現全国司祭団」(CPAJ)が自主的に結成され、教会の全面的な支援を受けながら、社会正義を求める運動を始めた。

カトリック教会は、一九七五年に言論の自由を求めて闘っていた『東亜日報』を公然と応援するようになり、一九七六年三月一日、明洞大聖堂における三・一運動記念ミサで電撃的に「三・一民主救国宣言」を発表した。これに対し、政府は「宣言」作成に関与した神父五人を逮捕、投獄したほか、政府転覆扇動の罪で金大中、文益煥牧師など一一名の身柄を拘束し、尹潽善前大統領や「韓国のガンジー」と呼ばれた咸錫憲など九名を不拘束起訴にした。

一九七九年一〇月二六日に朴正熙大統領が殺害されると政治的混乱が続き、一九八〇年五月には光州事件が発生した。この事件で市民二〇〇人が死亡したといわれるが、この事件の際、カトリック教会は光州から密かに持ち出された多くの光州の悲惨な状況を示す目撃証拠を提供する情報源となった。持ち出された証拠は日本の「カトリック正義

と平和協議会」で英語に翻訳され、それが世界に発表されたのである。

一九八〇年八月に大統領に就任した全斗煥は、金大中を逮捕し「政治風土刷新特別措置法」を制定して政治家五六七人の政治活動を禁止、放送局も強制没収し公営化して御用放送局とさせ、「言論基本法」を制定してすべてのマスコミを統制下に置いた。

こうした政府の動きの中で、国民のあいだに強い反米感情が拡がった。それは、韓国軍がアメリカ軍司令官の指揮権下にあつたため、アメリカは全斗煥の横暴を黙認ないし放置しているとみなされたからである。そして、この感情を背景にして一九八二年に釜山のアメリカ文化センター放火事件が起こった。放火犯はプロテスタントの神学生で、この神学生をかくまつたとしてカトリックの神父が投獄された。このため、カトリック教会はさらに軍事政権への抵抗を強め、待降節の第二日曜日を「人権の日曜」とし、四年に教皇ヨハネ・パウロ二世が訪韓した際には、光州がその訪問地の一つに選ばれた。

一九八七年一月、ソウル大生だった朴鍾哲の拷問致死事件を隠蔽しようとした政府に対し、「正義具現全国司祭団」は真実を明らかにするよう全国規模の抵抗運動を始めた。また、カトリック教会は御用放送局化していたKBSに対する受信料不払い運動を起こし、収入が激減したKB

Sは政府寄りの立場を放棄せざるを得なくなつた。

八七年は民主化運動が全国的に最も燃え上がった年であつたが、教会、特に明洞大聖堂はしばしば普通選挙を要求するデモの起点となり、またデモ隊が安全を求めて駆け込む場所となつた。ここは一種の聖域として警察も手を出すことができず、安全な避難場所とされたのである。

こうした激しい民主化運動の結果、ついに八七年六月、盧泰愚大統領候補は『六・二九民主化宣言』（社会全般の民主化措置）を発表した。これにより韓国の民主化の動きは加速化し、同年一二月には普通選挙によって盧泰愚が大統領に当選した。

韓国社会の民主化が達成された九〇年代以降も、教会は外国人労働者問題など社会正義の問題に関わり続けている。ただ最近では、教会は自身の中産階級化や靈性の枯渇、聖職者の権威主義などの矛盾に直面していると指摘されている。

七〇年代以降、カトリック教会の信者数は激増し、一九七〇年に七八万人だつたのが、一九八五年には約二〇〇万人、一九九五年には三四五万人を超え、その後も増加の一途をたどつて、現在は最初に触れたように四〇〇万を超えている。

この増加の仕方を見るならば、この急増がカトリック教会の姿勢の大転換と関連があることは明らかである。教会

が韓国社会と密接な関わりを持つたこと、とりわけ韓国社会が強く求めていた正義、例えば、労働者の人権や言論の自由の擁護、独裁政権に対する反対、軍事政権による光州事件の隠蔽への抵抗、普通選挙などを含む民主化要求などの運動にカトリック教会が深く参与したことが、多くの韓国人を教会に向かわせたのである。

かつて、度重なる弾圧と第一ヴァチカン公会議の影響で自らを社会から隔離してゲッター化し、社会との接点を最小限に抑えようとした教会、日本の植民地時代には総督府に従順だつた教会、強い反共主義の立場に立っていたため、李承晩の独裁政権をなかなか批判できなかった教会は、六〇年代を境に、どれほど自分たちが変わったかをはつきりと社会に示した。七〇年以降のカトリック教会は、正義と民主主義を望む多くの韓国人の人々と共に苦しみ、共に闘い、共に祈つたのである。

こうして、急激な人口の都市集中や経済成長により、かつての共同体から切り離され、伝統的な価値観には頼りきりせず、国家の分断と独裁政権に苦しみ悩む韓国人の人々とつて、カトリック教会をはじめとするキリスト教は、彼らに精神的、靈的な支えを与え、彼らと共に歩む存在となつた。これにより、韓国は今日見られるような、西洋諸国の植民地統治とは関係なくキリスト教人口の多い、アジアでは珍しい国となつたのである。

注

〔1〕一七八四年以前のカトリックと朝鮮の接触は、壬辰倭乱時にイエズス会士が従軍司祭として朝鮮半島に赴いたり、秀吉軍によって捕虜となって日本に送られた朝鮮人の中から改宗者が出たり、一七世紀から一八世紀にかけて、朝鮮人使節たちが北京でイエズス会士に接触したり、天主堂を見物したりする形で行われていた。これについては、拙論「曆と天主教——北京のイエズス会士に関する燕行使情報」『カトリック研究』七五号（二〇〇六年）を参照していただければ幸いである。

〔2〕朝鮮のプロテスタント教会も、西洋人宣教師の入国以前に朝鮮人によって誕生していたという前史を持つ。

〔3〕三大迫害とは、一八〇一年の辛酉教難、一八三九年の己亥教難、そして一八六六年から数年続いた丙寅教難のことである。

〔4〕カトリック教会は第一ヴァチカン公会議（一八六九—七〇年）以後、世俗化していく社会から自らを乖離させ外に対して閉じる傾向を強く持ち、朝鮮の宣教を担当したパリ外国宣教会の宣教師たちもその影響を色濃く受けていた。

〔5〕現在、安重根の破門は取り消されている。

〔6〕「陸軍少将前田昇閣下による序文」平山政十『萬歳騒動とカトリック教』カトリック教報社、一九三〇年、四頁。

〔7〕一九八四年のカトリック受容二百周年に、「正義具現全国司祭団」が発表した宣言文「この社会の人間化のための宣言」より。

〔8〕この時代にキリスト教勢力を労働者問題に向かわせた一つのきっかけは、全泰壹の焼身自殺事件であった。プロテスタント信者であった彼は零細裁縫工場が密集している平和市場で裁断工として働いていたが、一九七〇年一月一日、勤労条件改善要求を求めて抗議の焼身自殺をしたのである。この事件は学生や知識人の目を労働運動に向けさせ、知識人・学生・労働者の連帯を生み出す端緒となると共に、キリスト教勢力を労働運動に向かわせた。特に、プロテスタント教会は運動と信仰を結びつけ、運動の神学的な意味を探求して「民衆の神学」という大きな影響力を持つ神学を生み出した。

〔9〕この他、第二ヴァチカン公会議の方針に基づき、韓国の教会は一九六九年にミサの使用言語をラテン語から韓国語に変え、*Quo* の訳語を「天主」から固有語の「ハヌニム」に変更するなど、より土着する方向に動いたが、これも多くの韓国人改宗者を得る要素となったと思われる。

〔10〕この宣言は、毎年三月一日に新しく継承され、七七年には朴大統領への公開書簡の形で大統領に退陣を要求している。

〔11〕ただし、カトリック教会が一丸となって民主化闘争に邁進したといった理解は正しくない。巨大化する教会の中では、むしろ社会正義に関係した活動を積極的に行っている。

たのは少数派であったといえる。しかし、彼らの存在は教会の姿勢がいかに変化したかを鮮明に韓国の人々に伝えたのである。

### 参考文献

#### 〈日本語〉

- 韓国基督教歴史研究所著、韓哲曦・蔵田雅彦監訳『韓国キリスト教の受難と抵抗 韓国キリスト教史 一九一九―四一』新教出版社、一九九五年。
- 澤正彦『未完 朝鮮キリスト教史』日本基督教団出版局、一九九一年。

池明観『韓国現代史と教会史』新教出版社、一九七五年。

池明観『韓国 民主化への道』（岩波新書四二二）岩波書店、一九九五年。

関庚培著、金忠一訳『韓国キリスト教会史』新教出版社、一九八一年。

山口正之『朝鮮西教史』雄山閣、一九六七年。

#### 〈韓国語〉

文キュヒョン『民族と共に書く韓国天主教会史』全三巻、ピットウレ、一九九四年。

柳洪烈『増補 韓国天主教会史』上・下、カトリック出版社、一九六二年。

#### 〈英語〉

Don Baker, "From Pottery to Politics: The Transformation of

Korean Catholicism," Lewis R. Lancaster and Richard K. Payne

ed., *Religion and Society in Contemporary Korea*, Berkeley:

Institute of East Asia Studies University of California, 1997.

Robert E. Buswell Jr. and Timothy S. Lee ed., *Christianity in Korea*,

Honolulu: University of Hawaii Press, 2006.

Wi Jo Kang, *Religion and Politics in Korea Under the Japanese Rule*,

Lewiston/Queenston: The Edwin Mellen Press, 1987.

#### 〈ウェブサイト〉

カトリック正義具現全国司祭団 <http://www.sajedan.org/>

韓国カトリック司教会議／韓国カトリック中央協議会

<http://www.cbck.or.kr/>